

平成 27 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（共同利用型）成果報告

「18-19 世紀ロシア＝中央アジア間の隊商交易と交通に関する研究」

塩谷哲史（筑波大学人文社会系助教）

本研究の目的は、1860 年代後半に本格化したロシア帝国による中央アジア南部定住地域の軍事征服に前後する時期を対象に、ロシア内地と、ヒヴァを中心とした中央アジア南部諸都市との間の交通路の位置を解明し、それらを通じて展開された隊商交易の実態を解明することであった。とりわけ 1743 年にウラル川沿岸に建設された要塞都市オレンブルグに注目し、18-19 世紀にこの地を經由した隊商の経路、人的構成、規模、取引場所、取引品目、カザフ遊牧民の役割、彼らに対するオレンブルグ国境委員会を中心としたロシア当局の政策の変化を検討した。

本年度は、2 月にセンターに滞在し、北大図書館およびスラブ・ユーラシア研究センター所蔵の帝政期の地図、『軍事論集 Voennyi sbornik』誌、*Russian Military Intelligence on Asia* などのコレクションを閲覧、一部を複写した。現在これらの収集史料と、すでにロシア、カザフスタン等で収集した史料を照合させる調査を継続中である。

本研究の成果として、18-20 世紀初頭のロシアと中央アジアとの間の隊商交易の推移と、1840 年代に起きたロシア政府の交易に対する諸政策の変化を論じた国際学会報告“The Last Days of the Caravan: The Dynamics of Trade Between Orenburg and Central Asia in the Nineteenth Century”（2016 年 8 月 5 日、ICCEES 第 9 回大会、神田外国語大学、千葉）を始め、関連する 2 回の研究報告を行った。本研究課題の遂行に対して、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの図書室および事務室の方々のご支援に深く謝意を表したい。なお、前年度の研究課題「アムダリヤのカスピ海への転流計画から見た帝政ロシアの中央アジア統治」に関して、「ニコライ・コンスタンチノヴィチ大公のアムダリヤ転流計画—英露関係とトルクメン問題の文脈から—」と題する論文が『内陸アジア史研究』第 31 号（査読有）に掲載決定済である。